

大学相談室におけるグループ・アプローチ

—「臨床心理・教育相談室」フレンドルーム活動をもとに—

田母神賢一, 金成美恵, 神尾直子, 佐久間恵, 佐々木千加子,
富田理子, 湊園実, 南真嘉, 籠橋美知子 (福島大学大学院教育学研究科)
中野 明德 (臨床心理学), 青木 真理 (教育臨床学)

福島大学教育学部附属「臨床心理・教育相談室」では、相談活動の一環として、不登校などの児童生徒を対象にグループワークを行う「フレンドルーム」が開設されている。本稿では、開設後丸3年が経過したフレンドルーム活動について、運営の定着化が進んだ本年度の活動を詳細に報告した。次に、グループや個人に焦点を当てた事例考察を行った。以上をもとにフレンドルーム活動の評価と展望を行い、大学の相談室で行うグループ・アプローチの有効性について触れた。

〔キーワード〕 不登校 グループ・アプローチ 大学相談室 集団

I はじめに

「フレンドルーム」活動は、福島大学教育学部附属「臨床心理・教育相談室」活動の一環として、1999(平成11)年度から開始された。これは、中野ら(2002)、多田ら(2002)によれば、不登校及び学校不適応感を抱いている児童生徒(以下メンバー)に対して、人間関係作りを目的としたグループワークを行うものであり、その直接的な運営は、「臨床心理・教育相談室」の教官の指導のもと、臨床心理学・教育臨床学を専攻する筆者ら大学院生(以下スタッフ)によって行われている。したがってフレンドルーム活動は院生の貴重な臨床経験の場にもなっている。筆者らはこの活動を通して、メンバーが少しずつ集団の中で自分らしさを見せたり、中にはリーダーシップを発揮し始めたりする姿に直に触れる中で、グループ・アプローチの有効性などについて深く考える機会を得た。

II 目的と方法

本稿の目的は、フレンドルーム(以下FR)が設けられて3年が経過したのを機に、今年度のFR活動報告を題材として活動を再検討するとともに、メンバーやグループ全体に焦点を当てた考察を行い、今後のFR活動の展望と、大学の相談室で行うグループ・アプローチの可能性に関して示唆を得ようとするものである。

考察の方法は次の通りである。①FRの2002(平成14)年4月から2003(平成15)年2月までの活動について、参加観察法により、グループと個人過程の観察を行った。②SD法を用いた質問紙調査(5段階評定)による「自己イメージ」と「FRイメージ」の測定を行った(以下イメージ調査と略す)。「満足な—不満足な」

「親切—不親切な」等19項目からなる自己イメージ調査と、「大切な—大切にない」「自分の意見が言えるところ—言えないところ」等20項目からなるFRイメージ調査を7月・12月に実施し、結果を比較した。

なお、①②の方法は、前年度、多田ら(2002)が行った方法に準じたものである。

III 2002(平成14)年度のFR活動実践

ここでは、3年間の実践の中で形成されたFRの構造について紹介し、次に、本年度一定の構造化が進んだ、スタッフの体制づくりとメンバーの保護者への対応について述べる。

1. 構造

(1) 対象者

学校に行くことができなかつたり、友達づくりが苦手だったりする小中学生を主対象としている。定員は設けていない。本年度は8名参加(後述)。

(2) 場所

ほとんどの活動は、福島大学教育実践総合センター3階の「集団面接室」で行われる。これは、メンバーにとってFRが安定した居場所になるようにとの配慮に基づく。本年度はさらに、野外や体育館、調理実習室、実践センター「プレイルーム」等、活動内容により様々な場所を利用した。なお、場所変更は予めメンバーに伝えられる。

(3) 時間

月2回間隔で、13:00~15:00の2時間で行われる。大学の長期休暇中にあたる3月と8月は休みとなる。活動を前期(4~8月)・後期(9月~3月)に分け、年間15回程度の活動となる。

(4) メンバーの受け入れ方

F R参加希望者は、まず「臨床心理・教育相談室」の教官との個別面接を受ける。その後数回の見学等を経て、本人の参加の意志、保護者の同意が確認され、スタッフが受理することにより正式参加となる。

(5) 「臨床心理・教育相談室」の他資源の併用

F R活動と並行して、個別面接やメンタルフレンド(以下MF/不登校や発達障害の児童生徒の家庭を院生が定期的に訪問し、遊びや勉強を通して心の交流を図るもの。週1回1～2時間が多い)等の個別対応が行われる場合がある。本年度はMF活動の一部をF R参加に組み込ませた例もあり、複数資源の活用が進んだ。

(6) スタッフミーティング

毎回、活動日の1週間前までに打合せを行い、計画・準備を進め、直前の最終確認を経て活動に臨んでいる。活動終了後は、スタッフ全員で振り返りを行う。ここでは、グループ全体の様子や個々のメンバーについての行動観察を報告し合い、検討を重ねている。

(7) スーパービジョンの充実

月2回間隔で、「臨床心理・教育相談室」の教官に振り返りの内容等について報告し、スーパービジョンを受けている。また、3月には年間の総括を行い、次年度へ向けて具体的指導を受けている。

(8) 保護者との連携

スタッフが用意した「フレンドノート」を活用し、保護者との情報交換や諸連絡を行っている。さらに各回の振り返りでは、「☺スマイル会(親の会)」(後述)のスタッフとの情報交換を行い、連携を図っている。

2. スタッフの体制づくりの推進

(1) スタッフ引き継ぎの改善

年度当初に数回、大学院2年生より1年生への引き継ぎを行い、運営上の課題やメンバーの特徴・援助の留意点等を確認しあい、本年度の個別目標・全体目標の参考とした。また、従来は、概ね前期までは2年生が活動の中心で、1年生が本格的に活動を始めるのは後期からであった。本年度は、前期の早い段階(5月)から1年生が中心となり、ローテーションを組み、ファシリテーターを務めた。また一部の2年生は後期も継続参加し、活動のつなぎ的な役割を果たしてきた。

(2) メンバー及びグループ理解の共有化

前年度までは、スタッフによっては活動に全く参加しない回があった。本年度は、単発の参加ではメンバーの課題や変化、グループ全体の雰囲気などが把握しにくいとの判断に基づき、毎回スタッフ全員(9名)で活動を行うよう改善した。具体的には、事前打合せ・事後のミーティングの全員参加、活動当日の役割分担(ファシリテーター、茶話会準備等)のローテーション化、などである。したがってスタッフの役割は固定しておらず、毎回変わる。さらに、毎回サブ・ファシリ

テーターを置くとともに、次回ファシリテーターを務める予定のスタッフは必ずその前の回に直接参加するようにし、メンバーやグループの理解の促進を図った。

(3) メンバーの個性への配慮

個々のメンバーに対し、毎回スタッフが1名ずつ“付き人”となり、行動観察やアセスメントの中心となった。但し“付き人”は固定しなかった。理由は、メンバー同士やスタッフとの関わりを誘導するのを避けたのと、メンバー全員の行動特性を理解し、グループ全体の中で個々のメンバーを援助していく意識を持ち続けるためである。但し、発達障害等があり特別なケアが必要なメンバーには、スタッフを固定して対応した。

3. 親の会(☺スマイル会)の運営

F R参加メンバーの親が待機する「待合室」が、「ひとりで悩む親をなくすための居場所」となることを目指して、本年度から親を支援する活動を開始した。運営にあたっては、①個人を尊重する、②受容と共感の態度で信頼関係を築く、③参加者が全員参加できるものを行う、④実際に体験できるものを行う、⑤葛藤する参加者への援助をする、⑥集団のルールを守る、⑦活動を継続し評価する、ことに視点を置き、スタッフ2名がリーダー、コリーダーとして携わった。内容は、F R活動時間帯の2時間を1セッションとし、前半を挨拶・連絡事項・情報提供・ウォーミングアップとした。後半はフリートークにあて、その日のテーマをその場で親から出してもらった。今年度の目標は、1)グループの雰囲気作り、2)参加者相互の交流、3)自主参加の3点とした。なお、詳細は別稿にて報告される。

4. 参加メンバーの概要

本年度の参加メンバーを表1に示す。主訴は主に不登校であるが、後期に場面緘黙児2名(F男、H子)が新たに加わった。完全な不登校はA子、C男、E子、F男、G男の5名。保健室登校はH子のみ。教室登校している者はB男とD男である。さらにB男はAD/HDの診断を受けているなど、メンバーの課題が多様である。また、本年度中学校卒業予定のE子とG男については、本年度最終回をもってF R修了となる。なお、F男とH子にはそれぞれMFが常に傍についてサポートしている状態であり、自ら進んで他者と関わりをもつことは、現時点では難しいと考えられる。

IV グループ全体事例の呈示

ここでは、2002年4月から2003年2月の期間の、F Rグループ全体の変容過程を分析の対象とした考察を行う。各回の直接参加人数は、平均するとメンバーが7～8名、スタッフが4～5名である。なお、グループの活動内容、活動目標は表2にまとめた。

表1 参加メンバーの概要

(2003年2月現在)

メンバー	主 訴	正式参加時期 (本年度参加回数)	本 人 の 様 子
A 子 (中学1年)	不登校	2000年11月～ (12/15)	中学入学後、一時期登校したが、再び不登校になる。状況を察せず、浮いた行動が見られる。
B 男 (小学6年)	AD/HD	2001年5月～ (13/15)	もの作りの回などは、次第に活動が苦痛になってくるよう。他者欲求が強い。
C 男 (中学2年)	不登校	2001年9月～ (15/15)	明るく活発でD男と共に活動を盛り上げている。新メンバーへの配慮も見られる。
D 男 (中学1年)	参加当時は不登校	2001年9月～ (15/15)	中学入学後完全登校。活発でC男と共にリーダー的存在。たまに逸脱行為が見られる。
E 子 (中学3年)	不登校	2001年9月～ (15/15)	積極的な行動はないが、自分の考えを持ち、伝えられる。料理や描画等、活動内容によっては得意分野が活かされている。
F 男 (小学4年)	不登校、場面緘黙	2002年10月～ (7/7)	MFが傍につき参加。質問等への意思表示はできる。MFが離れることに不安が強い。
G 男 (中学3年)	不登校	2002年11月～ (6/6)	自己表現が少ないが、活動には積極的に参加。ものを作る際になかなか決められない。
H 子 (小学5年)	保健室登校、場面緘黙	2002年12月～ (5/5)	MFが傍につき参加。他者との関わりは少ないものの、活動には意欲を持って参加する。

表2 2002(平成14)年度FR活動の概要

「 」はエクササイズ名

活動日	活 動 目 標	活 動 内 容
4月①	新たな人間関係を築く第一歩として、メンバーの名前や特徴を覚える(確認しよう)	名札作り・交換、「自己紹介ゲーム」
5月①	集団遊びを通してメンバー間の会話を促進する	名札作り・交換、「何でもバスケット」「俳句作り」
5月②	メンバー間の多様なコミュニケーションを促進する	バドミントン、ドッチボール
6月①	集団の中で、発言による自己主張ができるよう促す	名札作り・交換、「陣取りじゃんけん」「ジェスチャーゲーム」、次回の相談
6月②	協調性を高め、共に頑張ったという達成感を得る	お菓子作り(ケーキなど)
7月①	共同作業を通じて、共通目標を成し遂げた時の達成感を分かち合う	「新聞パタン」、短冊作り(飾り作りと飾り付け)、イメージ調査
9月①	運動を通してメンバー・スタッフ間の交流を深める	「夏の思い出」、ドッチボール
10月①	楽しいゲームを通してメンバー間の交流を深める	「季語のしりとり」、描画
10月②	野外での運動を通してメンバー間の交流を深める	キックベースボール、鬼ごっこ
11月①	新メンバーが旧メンバーに馴染める雰囲気を作る	名札作り・交換、紙粘土
11月②	新メンバーと旧メンバーの関わりを促進する	「時間だよ」「陣取りゲーム」、クリスマスカード作り
12月①	メンバー間、メンバー・スタッフ間の交流を深めるとともに、活動を楽しむ	クリスマスの飾り作り・飾り付け、クリスマス会(「あまのじゃくゲーム」、プレゼント交換)、イメージ調査
1月①	全員で1つの作品を作ることによって、メンバー間の自発的交流を促す	冬の散歩、大きな絵づくり
2月①	運動による身体的コミュニケーション等を通して、メンバー間の自発的交流を促す	ドッチボール、バスケットボール
2月②	1年間の活動を通して自分自身を振り返る	「あまのじゃくゲーム」「ハンカチ落とし」、寄せ書き作成、アンケート(1年間の感想など)、修了式

<注>この他毎回行っている活動として、「フリートーク」(活動開始時)と「茶話会」(活動終了前)がある。

以下、前年度からの継続メンバーである5名で活動を行った4月から7月までを第1期、第1期の5名に新メンバーの4名が順次加わった(見学期間も含む)9月から1月までを第2期としグループの変容を追った。

第1期 集団の安定とリーダーの芽生えの時期

本年度スタート時のメンバーは、みな昨年度からの継続メンバー(旧メンバー)であったが、リーダー的存在のメンバーが卒業したため、多くの新スタッフの加入で、グループとしてのまとまりがどのようになるか若干の不安があった。しかしその心配とは裏腹に、C男やD男は、場を盛り上げるなどリーダーとして皆を引っ張って行ってくれそうな雰囲気を感じさせ、和やかな雰囲気ですることが出来た。5月に入り、スタッフとメンバー間の交流が増えるにつれ、特定メンバー間の仲は親密になるものの、メンバー全体での交流が減るということがみられた。メンバーとスタッフの直線的な関係が目立ち、なかなか第三者を含めての交流が見られなかった。そこで、全体目標として「メンバー同士のコミュニケーションを促進する」を掲げ、スポーツや、共同作業を意識して取り入れた。また、各メンバーの得意分野を活動の中に盛り込むなどの工夫も行った。こうした活動の中で、徐々にC男やD男がリーダー的存在としてみなを引っ張ってしてくれるようになり、グループは更に安定したものとなった。

第2期 新たな集団形成の時期

第1期まで、FRが「出来上がり80%のグループ」(スタッフの共通認識)として成長し、また居場所としての機能を果たしたが、新メンバーの参加があり、グループの雰囲気が大きく変化したのが第2期の特徴である。旧メンバーにとっては1年ぶりの新メンバーの加入であった。それまでリーダー的存在であったメンバーが活動の中に個人的な所有物を持ち込むといったことが見られた。これは、グループダイナミクスの変化を察知した旧メンバーの自己主張的な行動といえるだろう。また、5名から8名へのグループの拡大、小学生加入による年齢差の広がりなどにより、集団としての凝集性は弱まった。スタッフの間にも、新メンバーへの配慮とグループ全体への配慮のバランスに戸惑うなど、やや動揺がみられる時期でもあった。一方、10月頃からは、旧メンバーが新メンバーへエクササイズのやり方をさりげなく説明するなど、新メンバーへの配慮・気遣いが見られるようになった。また、メンバー同士の会話は少ないものの、お互いを認め、自然な雰囲気で活動に参加できるようになってきた。

イメージ調査の結果 (表3参照)

評定結果は、ポジティブイメージとネガティブイメー

ジにカテゴライズし、ポジティブ方向の「とても」を5点、「まあまあ」4点、「普通」を3点、ネガティブ方向の「まあまあ」を2点、「とても」を1点と数量化し、個人別に個々のイメージの平均値を算出した。

自己イメージがポジティブ方向へ向かったのは、継続メンバー4名中3名であり、残りの1名も0.05点下がったのみである。彼らにとってFRを通して自己受容が進んだものと思われる。また、FRイメージは、継続メンバー全員がポジティブ方向へ向かっており、特に1点以上増加したメンバーが2名いるなど、FRが居心地の良い場所となっていることが推察された。一方新メンバーのうち2名は、継続メンバーに比べると全体的に低い結果となった。

表3 「自己イメージ」「FRイメージ」の平均評定値

メンバー	自己イメージ 評定値		FRイメージ 評定値	
	1回目	2回目	1回目	2回目
	7月	12月	7月	12月
A子	3.26	3.58	4	4.05
B男	3.11	3.65		
C男	3.58	3.53	4.65	4.5
D男	3.11	4.63	3.4	4.95
E子	2.0	2.05	3.5	4.5
F男		2.42		2.55
G男		3.32		4.4
H子		3.47		3.4

<注>メンバー名は表1に準ずる

考察

第1期が集団として安定しているのは、継続メンバーのみであり、安定した人間関係やグループがすでに出来ていたこと、多くの新スタッフの存在が、相対的に継続メンバー同士に「知り合い」としての意味合いを際立たせることになったこと、スタッフが音楽をかけるなどし、リラックスした雰囲気作りに努めたことなどが考えられる。また、1つのものを全員で作りに上げる共同作業やスポーツは、メンバーの一体感を促したと考える。さらに、個々のメンバーに活躍の場を設けたことは、自尊感情の高まりと、お互いが尊重し合う姿勢をもたらしたと思われる。以上の要因により、グループとしての凝集性が高まったものと思われる。

第2期は、新メンバーの加入がグループの大きなクライシスを生み出した。表2の活動目標で、スタッフが継続的に「交流」を掲げていることや、旧メンバーが私有物を持ち込むことに象徴的に示されている。一方、旧メンバーから新メンバーへの気遣いが見られたことは、グループの成長面である。新メンバーにとっては、集団との関わりの第1歩の場としてFRが機能したのと考えられる。また、イメージ調査では、旧メンバーに第2期のFRイメージが上昇した者が多く、集団が変化しても、旧メンバーにとってはポジティブ

なものとして受け取られていることがわかる。つまり旧メンバーにとっては、凝集性が弱まって自分もそこにはいたい場所として捉えられており、FRが根付いているものと推察された。

V 個別事例の呈示

ここでは、表1のうち、A子、D男、H子の3人を事例として取り上げる。A子は、メンバー中最も長い期間参加している事例、D男は、本年度のメンバーの中で最も変化が見られた事例、さらにH子は、FRとMFが並行されている数少ない事例である。

事例1：『3期目の参加となる不登校A子の事例』

事例の概要

学年・性別；A子(中1女子。FR参加当時は小5)。家族歴・現症歴；父親、母親、姉、双子の姉、本児の5人家族。2000年夏休み以降不登校。小児科に月1回の通院。診断は『起立性調節障害』。

FR参加までの経緯；完全不登校のため、保護者より家庭以外の関わりの場としてFR参加を希望。本人の意思を確認し、正式参加となる。

事例の経過

2000(平成12)年度

参加当初は、FRに同級生の女子がいて意気投合し、会話も弾んでいた。FR活動には全て参加したが、グループ活動をするというより、その女子と会うために参加している印象であった。

2001(平成13)年度

FRは学校行事の都合による欠席以外は全て参加した。前期のFR活動ではお菓子作りがきっかけで、中3の男子や低学年の男子と話すようになった。後期は他のメンバーの言動に反応するということができるようになってきたが、苦手と思っている人には全く接触しない。活動内容に対しても同様の傾向がある。なお、学校へは断続的に登校しているものの波が多い。だが、ようやく時々学校で給食を食べられるようになった。

2002年度前期

4月、中学の制服を着て参加。雑談の様子からは『昨年と違う自分を見て』と周りにアピールしているようにも受け取れた。バレー部に入部し毎日元気に行っているとの事。お菓子作りではD男との関わりが目立った。さらに他の男子メンバーとの会話が多く見られた。E子との間に一種の緊張が見られる事もあったが、作業中は協力して行っていた。彼女と話すきっかけが欲しいような印象をもつ。

学校はゴールデンウィーク明けあたりから休みがちになる。FRも2回不参加。7月、フリートークの際

の座席がE子の正面の位置になった時、気にはしているようだが視線はそらすなど、E子に遠慮している感じを受ける。E子に対してどのように接すればいいのかかわからないようである。また、学校では期末テストを欠席し、自宅受験したとの情報を母親から得る。

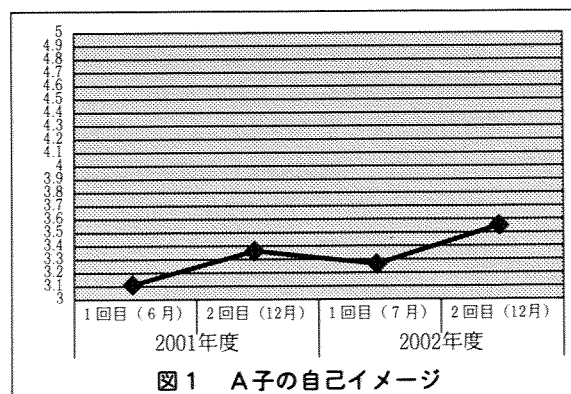
2002年度後期

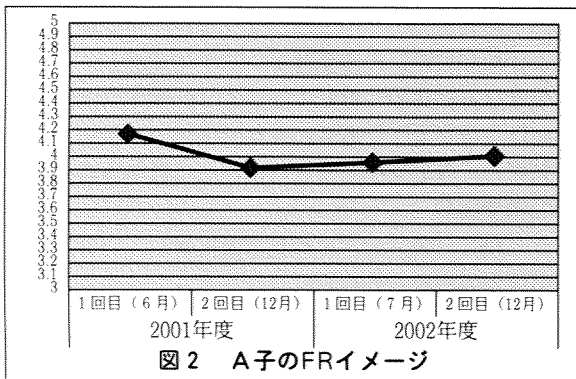
9～10月、新メンバーや見学者に対し、自分から話しかける姿が見られた。11月、フリートークでは中学校での文化祭の参加した話を楽しそうにしていた。またE子との会話場面も見られた。12月、クリスマス会でのプレゼント交換の時に流すためのCD(沖縄音楽)を持ってきてくれたが、クリスマス会の雰囲気と馴染めずに他のメンバーは不思議そうにしていた。だが周囲の反応はA子には届いてないようである。

考察

2002年度7月の時期に自己イメージが下がっているのは、中学校へ進学した事で登校への道がいったんは開けたが再び不登校になり始めた事によるものであろうと推測される。不登校という状況は12月になっても変化はないが、自己イメージの向上は、2002年度になって初めて2001年度からの参加者であるE子やD男と会話できるようになったということや、見学者という見知らぬ他者に話しかける事ができたことなど、対人関係を学習したためではないだろうか。またFRイメージが2001年度12月に下がっているのは、自分のポジティブな変化を周囲に評価される機会が少なかったから(多田ら,2002)と考えられる。2002年度にそれが向上しているのは、A子の好きな描画や工作を活動に多く取り入れたことを通して、評価される機会が増えたためと思われる。また、A子は小・中学校を通じて単学級の持ち上がりであるため、クラスメイトの変化もなく、さらに双子の同胞と比べられるという中でプレッシャーにさらされている。したがって、FRという双子の姉がいない環境が、彼女にとって姉と違う経験ができる活動の場を与えていると考える。

しかしこの3年間を通して、話の流れや周囲の雰囲気を読んで発言するという事に適切さを欠くことが多く、本人の課題として残された。





事例2：『不登校から教室登校へ移行したD男の事例』

事例の概要

学年・性別：D男（中1男子。FR参加当時は小6）
 家族歴・現症歴：父，母，兄，妹，祖父，祖母，本児の7人家族。小5の1学期より登校を渋り始め，Yクリニックで治療，面接開始。その後断続的に不登校。FR参加までの経緯：D男の学力低下を心配した両親がMFを電話依頼。しかし自宅遠方のためMF派遣はできず，代わりにFRに参加することとなった。

事例の経過

2001年度

参加当初は落ち着きがなく，話し方や態度が冷めた感じで本当の姿を隠しているような印象。活動中，突然ヨガを始めるなど突飛な行動も見られた。自己アピールの仕方がわからないようである。だが本人は初回からリラックスした様子で参加し，メンバーとの会話も持つことができた。しかし他のメンバーに礼を言わない，会話の時に相手の顔を見ない等，コミュニケーションに課題があった。

学校では卒業文集で自分の不登校を題材にし自分を振り返った。FR活動中の落ち着きや集中力を欠く行動は，この時期の心の変化や動揺の表れと思われる。

2002年度前期

C男との会話のやりとりが頻繁に見られるようになり，独り言もあるが表情は笑顔で，周囲との関係づくりも良くなった。母親からは学校では友人もでき順調であり，「ひと山越えた」という発言。欠席もほとんどしなくなった。本人も自らの変化を実感し気持ちに余裕が出始めたようである。6月になると，C男中心だった関係から，少しずつ他のメンバーへの関わりができた。FRには毎回制服を着て参加。学校に通学していることのアピールか。一方学校でも，友人に対し，内緒と断った上で，「FRに行っている」と告白している。この時期母親がFRの終了を勧めてみたが拒否。学校に適応し始めているものの，FRに居場所としての安心感と依存の気持ちがあると思われる。7月になると，D男の奇妙な行動は少なくなる。C男

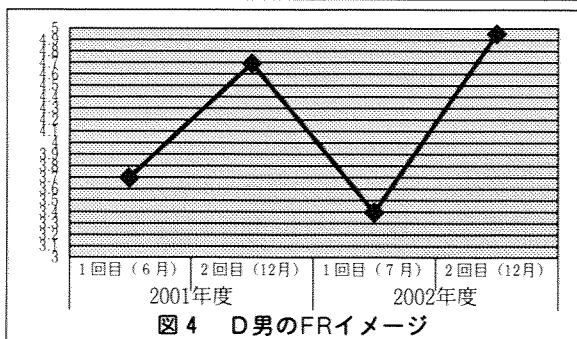
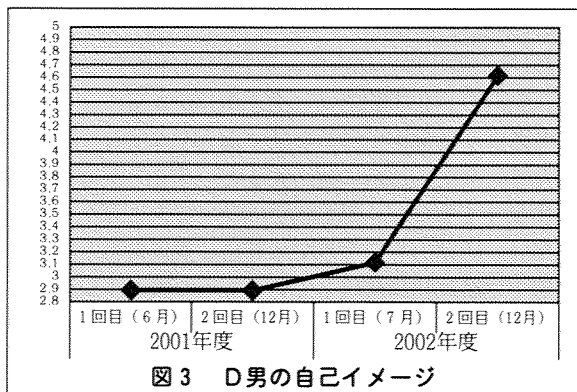
と共にリーダー的な雰囲気醸し出しつつあり，他のメンバーに話しかける様子も見られるなど，心にも余裕が出てきた。

2002年度後期

9月，一時途絶えていた独り言，指いじりなどの拘りが感じられる行動が復活し，やや退行を見せる。新学期が始まり落ち着かないのか。ただし学校へは休まず登校している。10月のある回では，FR当日体調が悪かったが，学校を休むとFRも参加できないと思っているらしく，FRに参加したいが為に学校へも無理に登校したこともあった。FRに対する執着は内面的な不安定さの現れと推察される。11月以降は，C男との関係を中心にしながら他のメンバーとの自発的な交流も持たれるようになる。また，ゲームでの皆の順番を決めたり，他のメンバーに説明をしたりとリーダーシップを発揮し始めた。周囲に気を配る余裕さえ感じられるようになっている。

考察

D男の変化は著しく，それはイメージ調査の結果にも表れている。特に2002年12月時の自己イメージの上昇は顕著で，ほとんどの項目が中央からポジティブに大きく変化している。スタッフの行動観察でも同様のことが認められており，自分に対する自信，自己肯定感ができたと推察できる。だが「自分の意見を言う一言わない」の項目のみが中くらいに位置し，D男がここを自分の課題と自覚していることが明らかになった。今後は日常場面での自然なやりとりの中で，相手の気持ちを推し量るといったコミュニケーションの取り方が課題となると思われる。



事例3：『フレンドルームへの参加とメンタルフレンドの派遣を併せて行っている、場面緘黙があり保健室登校をしているH子の事例』

事例の概要

学年・性別；H子（小5・女子）

家族歴・現症歴；父，母（主婦），姉（中2）と本人の4人家族。I幼稚園に入園後，1年でJ地区に引越す。その後はバス通園をしていたが，「バスに乗りたくない」と訴えたことがあった。小学校入学後，1年時は近所などに仲の良い友達が数名でき，2年時までにはよく遊んでいた。だが3年に進級した際に再び引越すとその友達とは疎遠になった。さらに同時期に執拗ないじめに遭い，次第に友達を信じられなくなった。徐々に学校を欠席するようになり，5年時の教室登校は1回のみ。家族とは話すが，その他の場面では体も強張り反応を返せない。場面緘黙である。現在は保健室登校をしており，帰宅時間はまちまちである。

FR参加までの経緯；MFとの一対一の関係から集団の中での他者との関係作りへつなげるため，3回の見学を経て，本人の希望により12月から正式参加。

MF、及びその活動内容；福島大学大学院1年に在籍（女／以下Kと示す）。MFの訪問は，FRが行われない週に1回・1時間で，H子の好きなゲームや，H子が得意な『もの作り』をしている。FR時には，自らの他のメンバーと交流できないH子の脇に専属スタッフとして付き，H子をサポートしている。

2003年1月末までの関わり；FR参加5回（見学3回含む），MF訪問5回（2002年12月～）

事例の経過 <注>月の後の○番号は表2に準ずる

FR見学期間（2002年10月②，11月①②）；母親と片時も離れることなく見学。1回目はH子の苦手なスポーツということもあり，離れた位置で活動の様子を見ていた。母親とは楽しそうに会話をするものの，スタッフが話し掛けると緊張して体をこわばらせた。話し掛けには困ったように視線を彷徨わせるが，反応はない。2回目はスタッフやメンバーとの交流はなかったが，紙粘土作りに集中し，丁寧に作品を仕上げた。3回目は活動に参加したが，その際KがMFとして関わることが決まっていたため，母親と共に傍らについていた。H子とKの関係は全くできておらず，問いかけや促しには辛うじて視線で反応する程度だった。

FR正式参加1回目（2002年12月①）；活動が始まったとしても，自ら進んで動きを見せることはなかった。シール交換の場でも母親やKの仲介が必要だった。しかし母親がスマイル会参加のため途中で席を外してからは，Kのみを伴って活動に参加できた。他者との交流はないものの，ゲームなどに積極性が見られた。なお，イメージ調査の結果は，FRに対しても自分に対しても

好感的であった。Kの質問への反応は微かな頷きといった身体的表現のみ。

MF B子宅訪問（2002年12月①②，2003年1月①②，計4回）；初訪問時は，H子の自室を案内してもらい，FRで行ったカード作りをした。2回目はオセロ，3回目はビーズ作り，4回目は折り紙で作ったカエルを飛ばして競争した。母親はMF中は別室にいる。1～4回目の間，H子とのやり取りは頷きや指差し等の身体的表現が主であった。3，4回目には無声音による応答もあった。また，訪問回数が増えるに従ってジェスチャーがしっかりし，笑顔も多く見られるようになった。Kの出迎えや見送りは母親のみ。1度だけH子も外まで見送りに来たが，Kが手を振ったのには応じなかった。

FR正式参加2回目（2003年1月②）；母親は同伴せず，MFと2人で参加した。フリートーク時は少しそわそわしながらも，以前ほど緊張した様子は見られなかった。散歩中，笑顔で構内を見渡していた。模造紙に絵を描く際は描く場所を自ら決めることはできなかったが，他スタッフとKとの会話を聞いて自分の絵に手を加えることがあった。身辺の片付け等も進んで行えた。FRは楽しいとのこと。

MF H子宅訪問（2003年1月②）；トランプ，鼓笛で演奏する楽譜をピアノで練習。トランプのルールが不明な所をKが尋ねると，無声音で「こっち」と教えてくれた。頷きや行動でのやり取りばかりではあるが，互いに意志の伝達がスムーズになってきた。

考察

FRとMFを並行させることの目的は，関係性の移行にある。この事例ではH子と母親との関係が非常に強く，H子1人では他者と関わりを持っていない状態であった。MFとして訪問することで，H子がリラックスできる環境での関わりが持て，『H子と母親』という親子の二者関係から，『H子とMF』という他者との二者関係を築くことができる。その関係をFRという集団の場に持ち込めば，MF等のサポートを通して，次第に複数の他者との関係を築けるようになると思われる。現在のところ，母親が傍につきながらもFRに参加できている。最終的にはMFのサポートなしでもFRに参加でき，他者と交流しながら活動できるようになることを目標としている。

しかしFRの場にMFのサポートを取り入れることで，他のメンバーから専属スタッフがついているメンバーが特別視されることも危惧される。そうすると，かえって集団の中でMFとの二者関係が強まってしまう可能性がある。以上を考察するには，事例としての経過が短いため，検討すべき課題とされた（なお，イメージ調査は2月時点で1回しか行っていないため，考察に入れなかった）。

VI 大学相談室におけるグループ・アプローチの有効性

以上のグループ及び3つの個別事例によれば、大学相談室で行うグループ・アプローチは、主に以下の点で有効であると考えられる。

第1に、FRという場の受け入れの柔軟性がもたらす利点がある。多田ら(2002)は、FRと適応指導教室の違いは目的の違いであるとし、学校復帰を目標とせず、他者との関わりの中から人間的成長を目指すFRでは、急激な変容は望めないが、無理のない自然な変容が可能であると述べている。参加メンバーの中には、不登校状態から登校へと向かったり、対人関係の変容が見られたりするケースも少なくないが、これらを一つの「成果」とすれば、この「成果」は活動目的そのものではなく、結果としてもたらされたものである点にFRの最大の特徴がある。このことは、目的が必ずしも明確でない「あいまい」な場におけるグループ・アプローチの有効性を示唆するものと考えられる。つまり、「あいまい」な活動が、個々のメンバーに応じた「ほど良い内的成長」をもたらしたと考えられるのである。

第2に、スタッフ(院生)の臨床実践の場という側面が、グループの凝集性とメンバーの対人関係学習に及ぼすプラス面に着目したい。ファシリテーターを務めるスタッフの中には、「うまくいかない」などの否定的な自己開示が活動中に直接・間接的に表出されることがあった。このことは、多様な大人のモデリングと、「そのままの自分でいてもいい」という被受容感・安心感をメンバーにもたらすことになる。事実、メンバーがスタッフをフォローする形で集団としての凝集性が高まる場面もみられた。つまり、スタッフの技量の未熟さを否定的にのみ捉えるのではなく、人間性を土台にし、あるがままの姿でメンバーに向き合うことが、集団の相互作用を促進すると考える視点も必要だと考える(もっともそれのみに依拠しては集団の成長にとってはマイナスであろう)。

第3に、当相談室の他資源との併用が可能であることが挙げられる。当相談室には、MFなどの活動や、本人もしくは保護者の個別カウンセリングなどが用意されている。FR活動のみでメンバーを支援するのではなく、これらの資源をすぐに活用できる環境にあることは重要であろう。

VII 今後の課題

FR活動が始まって3年が経過したが、必要物品が整い、活動体制の整備と内容の充実が進むにつれて、グループ・アプローチとしての課題がより鮮明になってきた。次年度以降の課題を列挙しておきたい。

1) グループ・個人目標の共有化の推進

現在、スタッフミーティング等を通して、個々のメンバーの目標と次回のグループ目標を設定(再設定)しているが、これはメンバーへは伝えられていない。メンバーへの目標の明示がFRという場にふさわしいものかどうかも含めて今後検討すると共に、毎回の活動に対するメンバーからの声を定期的に聞く機会を設けるなどの工夫を行っていきたい。

2) メンバーの受け入れ体制の整備

今後はメンバーのもつ課題の多様化と参加人数の増加が予想される。見学から正式参加までの部分の対応の定型化が求められる。また、参加時や経過のアセスメント方法とその結果の活用の仕方については、教官の指導のもと、今後スタッフで構築していくことが望まれる。

3) 毎回の活動プログラムの工夫の必要性

年齢や発達段階、発達障害等の個性性に配慮するのはもちろんであるが、プログラムの内容が個々に達成可能なものだけでなく、それがグループ活動につながるものにしていくための工夫が一層求められる。そのため、毎回の活動内容に無理がなく、楽しく、かつメンバーによって様々な関与の仕方が可能なものを用意する必要がある。また、ドッジボールやクリスマスの飾り付けの回はメンバーが生き生きしているとの報告もあり、共同作業を年間計画の中に適切に位置付け実践し、その成果をメンバー・スタッフ間で共有していくことが、今後ますます必要になるであろう。

4) メンバーの在籍する学校との連携

最近、FR参加への便宜等、学校から配慮をいただくことも増えてきた。メンバー理解と援助ニーズの焦点化のためにも、今後学校との連携をすすめ、共にメンバーを支えていくことが必要な段階に来ている。

5) 修了メンバーへのフォローアップ

現在、メンバーは中学卒業と同時にFR修了となっているが、修了後も参加を希望するメンバーがみられるようになった。そうしたニーズへの対応についても今後検討する必要がある。

< 文 献 >

- 1) 中野明徳・青木真理・中田洋二郎・生島浩(2002)：平成13(2001)年度福島大学教育学部附属臨床心理・教育相談室活動報告。福島大学教育実践研究紀要第42号。pp.95-102
- 2) 多田梓・青木真理(2002)：学校不適応児に対するグループ・アプローチについて。福島大学教育実践研究紀要第42号。pp.9-16
- 3) 前田ケイ(1999)：SSTウォーミングアップ活動集。金剛出版。
- 4) 中田行直(2001)：ファシリテーターの否定的自己開示。心理臨床学研究。Vol.19。pp.209-219

付記

本稿の執筆にあたり、福島県教育センター教育相談チームの先生方のご助言をいただいた。ここに御礼申し上げます。